

## コメント

近藤 雅樹

「非文字資料」の一つとして、このセッションでは「民具と民俗技術」が取りあげられた。

あらためて指摘するまでもないが、両者、すなわち「民具」と「民俗技術」は不可分な関係にある。なぜなら「民具」は、「民俗技術」が保持されているから作り出されもし（作る技術）、また、用いられもする（使う技術）ものだからである。こうした両者の関係性は、私たち自身にとって、いかに親密かつ身近卑近の事象であることか。そのことは、たとえば、次のように質問されたときに、よりいっそう強く感じとることができるはずである。

あなたは、何を「つくれる」し「つかえる」のですか？

このセッションの表題には、自立可能な能力の有無に対する問いかけが潜んでいる。「民俗技術」は、学習によって習得される後天的な能力である。だからこそ、今回報告される犁の形態に認められた多様さが、伝播経路の復元にあたって重要な判断材料となるのであり、尹氏の報告は「民具」が「民俗技術」に支えられていることを実証する一例である。

ところで、誰の目にも明らかなおり、牛馬を使役し、広域な平坦地の耕耘に適する点で、犁は、掘棒・鋤・踏鋤などを用いる人力耕作とはことなっている。急速にユーラシア大陸全域（ナイル川流域を含む）に伝播したと考えられるが、はたして、麦作・稲作のどちらに犁耕の起源を求めるべきなのか。古代における農耕技術の革新は、同時に農器具の開発・改良でもあったのだが、この問題を「民具」を通じて追求しようとするなら、穀竿の分布、二態様の鎌－穂刈・根刈－の存在など、複合的な展開が予想される。

高氏の報告は、一見したところ「民具」とも「民俗技術」とも無縁のように感じられるかも知れない。しかし、そうではない。節食行為には、箸やナイフ・フォーク、椀や皿、盆や食卓が伴っていて、しかも、民族による相違が認められるように、就寝行為にも、排泄行為にも、何らかの調度・器物は伴っている。俗に「旅先で枕がかわると眠れない」という。これは、就寝行為が単なる生理ではなく、躰けられた習慣になっていることを示している。眠りにつく前におこなわれる習慣的な行為はじつに多彩である。歯磨き、小用、神への祈り…。私的な癖のように思われがちだが、寝入る直前に必ず枕の位置をただすようなことがらも、決して無意味なものではなく、呪術の残存行為だと考えられるのである。「入眠儀礼」という。排泄行為にも、当然、さまざまな民俗事象が認められる。高氏の報告は、主として人糞処理に供される豚小屋の東アジア地域における分布と、排泄物の処理に関する経済効果に関するものだが、排泄行為に伴う儀礼化した習慣についても、さらに詳細な事例調査を通じて比較研究が進められることが期待される。開放空間か閉鎖空間か、あるいはまた、放屁音や糞尿臭に対する心理的・生理的感覚から創造される異界観念の表象化についてなど、興味がつきない。

周氏の報告は、両氏と違って具体的な「民具」に言及したものではない。従来の民族学・民俗学が、物質文化研究をおこなうに際して何を収集対象としていたのか、学問としての姿勢を問うものである。収集が、

視覚的に「快」の情感を誘発するものに限定されていたことが指摘されている。その点で、発表要旨の冒頭に「日本の民俗学には、柳田国男のほかにまた渋沢敬三の伝統がある」と記されていたが、報告からは、むしろ、彼らと同時代に民芸運動を提唱・推進した柳宗悦と渋沢との対比が鮮明に浮かびあがる。柳も、民族（民俗）文化をきわめようとした。しかし、彼が発見したのは自らが美的価値の表出を認め得た「民芸品」であり「民芸」という概念であった。そして、柳は「民芸」を美学の一分野に位置づけて新たな芸術運動を展開した。対するに、渋沢は、民族（民俗）文化を解明するために物質文化研究の構築を志向した。そして、人類の社会・文化を遡及的に研究し、再現するうえで有効な「非文字資料」として、身近卑近に存在する事象の中から「民具」という概念を発見した。